

Contents Vol.216

2019.3.18

02 ごあいさつ

03 NEWS

- 1 大阪体育大学スポーツ局の挑戦
- 2 ミズノと協定
- 3 大学スポーツ協会
- 4 岸和田市と連携協力協定締結
- 5 大島鎌吉賞に3指導者
- 6 教員採用試験現役合格52人
- 7 学生を支え、送り出すキャリア支援センター
- 8 3年生対象にキャリアフェスタ
- 9 平成31年度AO入試・推薦入試・一般入試速報
- 10 盛況だったオープンキャンパス2018

09 トピックス

- 1 平成30年度臨海実習
- 2 野外活動実習初年度
- 3 サンライズ・キャンプ12回目の絆
- 4 親子スポーツセミナーにケルン体大から講師
- 5 日本スポーツ整復療法学会最優秀奨励発表賞受賞
- 6 平成30年度教育後援会役員会
- 7 摂泉会第36回代議員会
- 8 金子名誉教授全国短歌大会で特選
- 9 雨山祭
- 10 暴力排除の講演会

14 コラム 窓

- 15 我が青春の記 藤原敏行 吉美 学

記事内職階、学年等は平成31年3月末日による



大阪体育大学スポーツ局の挑戦

体育会の近代化目指して

学内の運動クラブを統括し、大学としてスポーツ事業を進めるためにスポーツ局(宍倉雄輝局長)を立ち上げて間もなく1年が経つ。この間、基盤を揺るぎないものにするために、▽スポーツメーカーのミズノ(水野明人社長)と協定を締結▽地域のスポーツ活性化を図るため、地元の熊取町(藤原敏司町長)と協定を締結▽各クラブの指導者講習開講▽スポーツ庁の塩川達大学校体育室長を招き「運動部活動改革について」と題し講演会を開催▽わが国初の大学横断的な大学を支援する組織である大学スポーツコンソーシアムKANSAI(KCAA)でのデスカッションを実施▽2月24日には全国大学スポーツ・アドミニストレーター会議を本学で開催など活発に事業展開している。

スポーツ局が開局したのは昨年4月1日。本学は、2017年にスポーツ庁の委託事業である「大学スポーツ振興の推進事業(日本版NCAA)」の採択を受けて、大学スポーツを戦略的で一体的に管理・統括する部局の設置や、スポーツ庁が推奨している大学スポーツアドミニストレーター(大学内で企画立案、コーディネート、資金調達)の配置などを通じて、大学スポーツの活性化や、大学スポーツを介して大学全体の振興を図るため、体制整備に取り組んでおり、スポーツ局の開設となった。

本学が持つ資源を十分に生かし、スポーツの振興と発展を目指していくために全米大学体育協会(NCAA)や、英国のBUCSのような大学横断的な統括組織を参考に、スポーツ庁(文部科学省)が方策打ち出している「UNIVAS」実現を目指している。

一般的にこれまでの運動部は、選手の獲得に関する入学制度の活用や部活動運営費

の支給などは行っているものの、各々が所属する学生連盟(学生による自治組織)やスポーツ連盟の主導による影響を大いに受け、各連盟は、他競技連盟と包括的なつながりを構築していないことから独自の展開になっており、大学全体の相乗効果をもたらすまでには至っていなかった。また本学ならではの最新のスポーツ研究は、一部のクラブしか活用できず、体育大学としての利点を生かしきれいでなかった。スポーツ局は、各大学に部局の設置や、専門人材の配置を提唱しており、本学が次の10年を見据えて描いた大体大ビジョン2024が、日本の大学スポーツ界を変革する時流と合致したこともあり2017年9月に、他の7校とともにモデル校に選定された。

大学の体育会は前述のとおり、独自の展開が行われていることから閉鎖的な気質が残っている。それが様々な競技で明るみになったことからメディアを騒がせ社会的に問題視されるようになり、組織統治(ガバナンス)がより重要な意味をもつようになった。

運動部の司令塔、多彩なスタッフ

本学スポーツ局は、これらを教訓に、全体を指揮する統括ディレクターに、シンクタンクや財団に勤め、東京マラソンの実施、運営に関わり、奈良マラソンなどのシテイマラソンや、ランニング事業の創設実績がある浦久保和哉氏、スポーツアドミニストレーターに、本学レスリング部コーチで国体に10回出場、幅広い人脈を持つ姫路文博氏、サガン・ドリームスで営業や運営に携わり、Jリーグ、サガン鳥栖では興行を統括していた森田卓氏が実務を担っている。いわば本学運動部の「司令塔」だ。

浦久保氏は「プロ野球の球団経営を担うフロントのように、運動部全体の強化、教育、ビジネス、ガバナンスのすべて考えるための組織」と位置づけ、全運動クラブを一つのチームとしてとらえ、魅力の拡大と連携の強化のための施策を実行することで、学内外の関係者や地域の人々から愛される「大阪体育大学運動クラブ」の理想実現を目指している。

経営資源は選手や、スポーツ施設、研究成果と多岐にわたる。事業パートナーは自治体や医療機関で、熊取町、ミズノとは連携協定を結んでいる。熊取町とは、スポーツを通じた健康な暮らしとその拠点づくりを目標とし、シニア層の健康講座へのノウハウ提供や、人事交流を通じた政策面での協力に取り組んでいる。

また小学生向けのスポーツ教育、中学校への指導者派遣など、地域のスポーツ活動や環境整備にも取り組もうとしている。さらに注目は、関西空港と近いことでインバウンド(訪日外国人)需要を促進することを狙っている。2007年に大阪で開かれた世界陸上選手権大会では、陸上界を牽引する米国チームが、本学の陸上競技場をフル活用する事前合宿を行い、地域住民との交流をはかり、大きな成果をあげている。

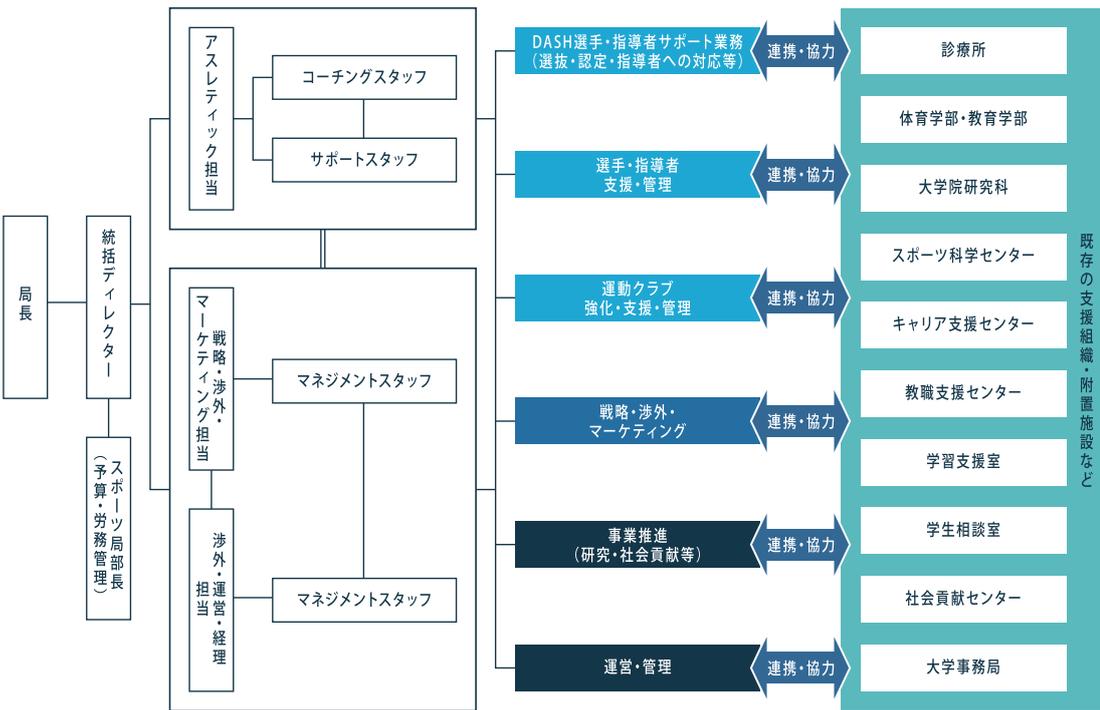
UNIVAS誕生、日本版NCAA

日本が目指す本場のNCAAは、アメリカンフットボールやバスケットボールなどの人気競技の放映権料などから年間約1千億円の収益を得ている。莫大な資金を稼ぎ出す巨大産業なのだ。多くの運動部はチーム愛称、カラーの統一、大学単体でマーケティングやブランド形成を図っている。日本版NCAAは、昨年10月に開かれた

日本版NCAA設立準備委員会で、大学横断的、競技横断的統括組織の新法人名称が、一般社団法人 大学スポーツ協会（通称UNIVAS）に決まり。大阪体育大学もスポーツ局を要として大きく動き出している。UNVASは3月1日、197大学、31競技団体が加盟して発足した。

早稲田大学の鎌田薫前総長が初代会長に就任。鎌田会長は「大学スポーツが一丸となって前に進んでいく態勢を取るのが喫緊の課題」と決意を語り、鈴木大地スポーツ庁長官は「大学同士、地域と大学など、いろいろな連携が構築される」と期待感を示した。

■スポーツ局組織体制(2018年4月1日現在)



ミズノと協定 スポーツで地域活性化

大阪体育大学は3月22日、スポーツメーカー、ミズノ（本社、大阪市）と「体育・スポーツを通じた連携と協力に関する協定」の締結式を本学で行った。

協業で地域貢献を行い、大学だけでなく地域全体をスポーツで活性化させることとした。ミズノが掲げる「より良いスポーツ」とスポーツの振興を通じて社会に貢献する」という経営理念を体现できるものとして、本学の運動クラブ、学生アスリートの強化と育成・健康・スポーツを通じた地域活性化に取り組む。

本学は、スポーツ局を新設し大学スポーツの活性化や、大学全体の振興を図るための改革に取り組んでいる。協定締結で地域への貢献だけでなく、学生のインターンシップ、ミズノの社員による授業の開講などの案があり、アスリートだけではなく、スポーツ界の発展に寄与する人材の育成を目指す。

岩上安孝学長は「息の長いお付き合いをさせていただくことになる」と熱い思いを語り、水野明人社長は「大阪体育大学はスポーツに理解が深い大学。日本版NCAAのモデル校になつており、連携できて光栄」と話していた。

またミズノの担当者は「用品を」使っただけの部のバ

オーマンスタップにつながればと思う。大学の部活動も地域、OB、OGたちの応援があつて強くなると思うので、(地域貢献で)サポートもしていきたい」と言い、本学職員は「お力を借りたい。トップレベルの(選手の)サポートをされている知見を学びたい」と力を込めた。



協定書を取り交わした岩上学長（左）、水野社長

大学スポーツ協会

スポーツ庁が大学スポーツの改革、発展を目的に創設の旗振り役となっている一般社団法人「大学スポーツ協会」(略称、UNIVAS(ユニバス))について、1月17日日本で、学長補佐の藤本淳也教授を講師に説明会が行われた。ユニバスは競技ごとに結成されているいわゆる学連と違い、大学横断的、競技横断的な統括組織で、日本の大学スポーツを欧米と肩を並べる水準にしようと、アメリカのNCAA(全米大学体育協会)を手本にしている。

今年度中に法人設立の予定でスケジューリングが進められてきたところ、大阪体育大学では2018年4月に運動クラブのアスリート支援やスポーツ事業推進の専門組織「スポーツ局」が開局の運びとなり、大学ス



大学スポーツ統括組織「ユニバス」について説明する藤本教授



大学スポーツ統括組織「ユニバス」の準備状況について報告が行われた説明会

ポーツ改革の時流と一致する展開になった。昨年10月に「ユニバス」と名称が決定した日本版NCAAは、2016年4月に文部科学大臣を座長に検討会議が設置され、2017年3月に発表された最終とりまとめで理念として、▽学業とスポーツの両立を目指す▽事故防止など安全性を向上させる▽大学スポーツで収益を上げそれを還元する好循環を創造する、などが掲げられた。これを受けて、同年9月には制度設計に向けた学産官連携協議会が発足。同時にスポーツ庁は、「大学スポーツ振興の推進事業」として日本版NCAAの目的に沿った組織整備をするモデル校8校を選定した。この「オリジナル8」に選ばれた大阪体育大学は、昨年7月に始まった新組織の母体

となる設立準備委員会で「学業充実」の分野を担当し、支援プログラムの検討を進めてきた。

この日の説明会には約40人が参加。藤本教授は「初年度の加盟大学は200大学、加盟競技団体は約20団体、学生アスリートは約10万人を目標としている」と規模のイメージを述べ、スポンサー企業を募って年間約20億円の収入を確保するとした。

ユニバスが目指す学生アスリートのキャリア支援では学業と競技の両立が柱になっ

岸和田市と連携協力協定締結

大阪体育大学と大阪府岸和田市は11月22日、岸和田市役所で、岩上安孝学長、永野耕平市長ら関係者が出席し、運動・スポーツ分野を通じて連携協力に関する協定を結び、締結式を行った。本学と岸和田市は、▽ユニバススポーツ体験会開催への協力▽岸和田市スポーツ推進計画策定内会議への学識経験者派遣▽運動教室の開催や協力▽初心者水泳教室にライフサージング部員の派遣などのスポーツに関する取り組みは既に行っている。

連携協定が結ばれたことで、スポーツに関するイベント・行事への相互協力や、これから開催される国際競技大会などの情報を交換するなどして、スポーツの活性化につながる取り組みが期待される。

本学がスポーツ分野を通じての連携協力に関する協定を結ぶのは、熊取町、貝塚市に次いで3番目。

ており、試合に参加するのに学業における必要単位数の基準を設ける案もある。説明会では教員から「単位が足りない学生を試合の出場停止にし、試合に必要な人数が確保できなくなったらどうするのか」と質問が出て、同教授は「学業不振の学生をクビにする仕組みではなく、そういう学生を作らないようにするのが目的。どんなサポートができるのかしっかり考えていかなくてはならない」と呼び掛けた。



協定締結した岩上学長(左)と永野市長

大島鎌吉賞に3指導者

新年互礼会で

新しい年のスタートに当たって新年互礼会が1月9日、教職員が一同に会して行われた。スポーツ競技の指導で顕著な業績のあった指導者に贈られる「大島鎌吉スポーツ賞」の授与式も合わせて行われ、功労賞は、ハンドボール部女子監督の楠本繁生准教授が受賞、奨励賞は陸上競技部部長の栗山佳也教授と、ハンドボール部男子監督の下川真良講師が受賞した。

互例会で野田賢治理事長は「昨年11月に中央教育審議会が2040年に向けた高等教育のグランドデザインを答申した。2040年に大学生は今の8割になると推計されている。昨年から高等教育の転換期だったとすれば、今年は大阪体育大学がどう



女子ハンドボール部の活躍で表彰される楠本監督

生きていくのか、真剣に考えなければならぬ。力を合わせて知恵を出し合うしかない」と述べた。岩上安孝学長は「健康で長生きは人類の大きな願い。それに比べられる活力ある大学づくりの妙薬は、人づくりにかかっている。昨年から大学改革に向けた検討をしており、足元を見つめ直すことが今年にふさわしい。専門性の造詣を見直し高めていこう」と呼び掛けた。

大島鎌吉スポーツ賞の授与式では、受賞した3人が登壇。楠本准教授が鍛え上げたハンドボール部女子は、昨年7〜8月にクアアアで行われた第24回世界学生選手権大会で優勝。さらに同年11月の高松宮記念杯女子第54回平成30年度全日本学生ハンド



野田理事長（右）から称えられる楠本准教授、栗山教授、下川講師

ボール選手権大会で優勝し、前人未達の6連覇を成し遂げた。下川講師が指導するハンドボール部男子も、女子が6連覇した大会で優勝し、大阪体育大学史上初の記念すべきアベック優勝となった。

栗山教授が率いる陸上競技部は、昨年6月の第102回日本陸上競技選手権大会の男子やり投げで、2位と3位の成績を収めた。野田理事長は「休日返上で学生に寄り添っていた姿を知っている。このような結

教員採用試験現役合格延べ52人

教育学部1期生が大健闘

平成30年度（平成31年度採用）公立学校教員採用試験の現役合格者が延べ52人となった。今年度は、教育学部1期生が「絶対に教師になる」という「情熱」を持ち、多くの学生がチャレンジし、結果を残してくれた。

合格者の内訳は、大阪府22人、大阪市5人、堺市2人、豊能地区、京都府、兵庫県、奈良県各1人、和歌山県4人、北海道、千葉県各1人、横浜市3人、福井県2人、愛知県、三重県、岡山県各1人、広島県市3人、愛媛県、鹿児島県各1人となっている。

教職支援センターでは、教員採用試験受験対策講座や、模擬面接・模擬授業等の指導や模擬試験の実施、卒業生も参加する夏の集中講座や面接指導も行っている。近年は、多くの卒業生の『合格』の連絡を受けている。

教員を目指す学生は、単なる受験のスキルだけでなく、人間的に成長し、言葉遣い

果につながったのは何よりの喜び」と称えた。

楠本全日本は、選手14人中、4人が在学生、7人が実業団チームで活躍している卒業生で、「大体大育ち」が多数を占める。楠本監督とは気心が知れた選手たちで、見事に優勝。1月11日、東京であった日本スポーツ賞で女子U-24が、「競技団体別最優秀賞」も受賞した。

や周りの人たちへの心配り、行儀良さを身につけてスタートする必要がある。現場に出れば、1人の教員として「即戦力」として期待される。そのためにも「常に学び続ける教員」でなければならぬことを繰り返し指導している。

すでに次年度に向けて学内セミナーや模擬試験等、採用試験対策に多数取り組んでいる学生が多く見受けられるようになってきた。『絶対に教員採用試験を合格する』と目標を持って頑張ってほしいと思う。

【教職支援センター長 寺野雅之】

卒業年度	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30
一次合格者	56	69	63	70	51	56	96
二次合格者	30	30	30	27	22	27	52

2018年度スタートと同時に、4年生の就職活動、また3年生の就職活動対策も本格化した。同時に2年生も就職活動時期や、採用状況が予測出来ず、早めの就職活動対策への意識づけを始めた。4月から12月までの活動状況を報告する。

■4年生の就活本格化

業界分析、履歴書・エントリーシートの添削など、学生の進路や希望に応じた指導を行った。教員、公務員も昨年を上回る合格者が出ている。就職市場は「売り手市場」にあり、上場大手企業や、学生が目指す企業への内定が続々と出ている。「売り手市場」と言えども「買い手市場」である業界や企業もあり、キャリア支援センターとして、正確な企業分析と最善の対応を行っている。

■3年生の個人面談

6月には3年生全員の個人面談を行い、進路目標を確認した。希望進路が定まっている学生には、採用試験に向けた対策の指導を、摸索中の学生には、輝かしい人生へどのように考え、進めていくかについてアドバイスした。3年生は就職活動対策、キャリアビジョンを学び、自身の目標に向けた準備を行っている。

■キャリアデザインII

キャリアデザインII（3年生選択授業）は、2年生で必修科目、キャリアデザインIの発展版としてスタッフ、講師が一体と

なり、より深く就職活動対策や、現場で活躍できる学生の育成を行なっている。

■業界見学ツアー

夏季休暇中には3年生を中心とした公務員、企業などの見学ツアーを開催し、業界研究の場を提供（消防、警察、ミズノ等）した。

■キャリアフェスタ

9月に行われた3年生対象のキャリアフェスタでは、教員、公務員、企業で活躍している社会人が、13教室で業界の説明や相談を2日間にわたって行った。大学あげでのイベントとなっているキャリアフェスタは「知らない世界を知ろう」を掲げ、多くの業界を知り、学生の業界の視野を広げ、将来に向けて動き出す良いきっかけとなった。

■キャリアデザインI

体育学部2年生必修授業として実施。キャリア支援センタースタッフをはじめ、キャリア教育専門の講師、OB起業家、また各業界で内定を勝ち取った4年生を

学生を支え、送り出すキャリア支援センター

祝！就職内定までの道のり

招へいし、キャリアビジョンや、就職活動対策について教育を行なっている。初回授業後には、キャリアについて意識が高まり、すぐにも相談したい2年生が多くおり、キャリア支援センターを訪れ、スタッフ総動員で学生に対応する日々が続いた。

■2年生グループ面談

2年生全員のグループ面談を実施し、キャリア支援センターや、スタッフに慣れもらうことを目的に、進路目標や就職活動、社会人とは、についてなど現時点での将来に向けた準備や目標について率直な気持ち聞いた。2年生の就職活動スケジュールや景気も予測し、早めの対策準備を自発的に始められるよう指導を行った。面談後、多くの学生が就職活動へのモチベーションが高まり、積極的にキャリア支援センターを活用する姿が見られた。

■学内セミナー

本学では昼休みの時間を活用し、授業やクラブ活動

を中心に、時間が限られる学生に公務員や、企業の人事担当者が職業説明や、相談を行なっている。職業研究やキャリアビジョンを描いていくための、大変重要な機会となっている。今年度も学内セミナー受講者から、内定者を多く輩出している。

■大体大就活交流会

12月に3回目となる、大体大就活交流会を開催した。3年生を対象に企業人事担当者や、終始和やかに有意義なグループワークや座談会を行った。コミュニケーション力を高め就職活動対策や、社会人として大切なことを多く学んだ。（企業18社 本学学生32人 他大学8人参加）

■本学キャリア支援センターの活動とあり方

内定に向けた就職活動指導はもちろんのこと、1回りの人生をどのように形にするかにも重きを置く。一人ひとりがそれぞれ感じる幸せの実現、就職先での活躍を目指し、日々学生とスタッフの二人三脚で語り合い、目標を共有し活動している。先を歩く人として、これまでの経験や教訓を学生に伝え、それぞれが持った価値観の醸成や輝かしい人生の実現を目指す。あらゆる分野においての日本一のキャリア支援センターを目指した戦略立案、活動を実施している。【キャリア支援センター】

知らない世界を知ろう

3年生対象にキャリアフェスタ

「知らない世界」を知ろう！「生」の声を聞いて、実際の「社会」を感じよう！

3年生を対象にした「知らない世界を知ろう」キャリアフェスタが9月25、26両日、本学で行われた。学生たちは1日4ブース（教室）、2日で8ブースを回り、現在第一線で活躍している企業の社員や公務員、教員たちの話を熱心にメモしたり、中には身を乗り出すようにして聞いていた学生も見られた。

教員を目指して本学に入学する学生たちが圧倒的に多いが、途中で進路変更したり、

自分の道しるべを見失ってしまう学生もおり、他大学にはない本学独特のキャリアフェスタに後押ししてもらい、自分の進路を決める学生もかなりの数にのぼる。

出展ブースは、商社・鉄鋼、建設、医療・医療機器、金融、インターネットサービス、食品、放送など20種以上あり、教員9人はいずれも本学の卒業生で、学生との距離感が近く、自分の体験を基に親身になって話をしてくれた。学生たちは、企業の担当者や教員に熱い質問をぶつけていた。

参加した学生にコメントを寄せてもらった。

〈参加企業等は次の通り〉

株式会社メタルワン（商社・鉄鋼）、株式会社鴻池組（建設）、日本通運株式会社（物流）、青年海外協力隊（JICA）、興和株式会社（医薬・医療機器）、和泉学園・泉南学寮（法務教官、進学（本学大学院）、海外留学（本学）、株式会社バンダイナムコファミリーズメント（エンターテインメント）、三菱商事株式会社（総合商社）、株式会社三井住友銀行（金融）、海上保安庁（会場保安官）、熊取町役場（行政職）、岩谷産業株式会社（エネルギー）、合同会社DMM.com（インターネットサービス）、京セラ株式会社（電子部品）、株式会社ぐるなび（eコマース）、リゾートトラスト株式会社（ホテル）、ネスレ日本株式会社（食品）、USEN・NEXT GROUP（放送）、吉本興業株式会社（プロダクション）、東京消防庁（消防官） 〓 順不同 〓



講師の話を熱心に聴く学生



教育学部 3年
中村 紗恵

教職以外も視野に

教育学部の私は、1、2年生の時は教師しか視野になく、就職活動に興味はありませんでした。10月に教育実習へ行き、実際に教師という立場で学校現場で過ごしてみると、教師として職に就き、生活していく自分の姿が想像できなくなり、教師以外の道も視野に入れていきたいと感じるようになりました。もちろん実習では、現場での経験をたくさん積ませていただき、充実した時間を過ごすことができました。しかし、経験して学ぶこと

ができたから見えてきたものがあり、そこから私は「まだまだ進路について知識がない」と感じていた時に参加したのがキャリアフェスタでした。
キャリアフェスタでは合計26のブースがあり、その中から8つのブースへ行くことができました。私が一番印象に残った企業は、リゾートトラスト株式会社のブースで、ホテル関係の企業でした。本学の先輩が来てくださったこともあって親近感があり、営業もホテル業もとても魅力的な内容でした。行くことができなかった企業もあり、これを機会に学内セミナーに積極的に参加し、もっと多くの企業を知りたいと感じました。
今回参加して、3年生になり、今まで参加した際には感じなかった親近感や、好奇心、焦りや不安など様々な刺激を受けました。多くの企業の方々が足を運んでくださり、プレゼンテーションをしてくださることは、他ではないことで、とても貴重な時間を過ごすことができました。



体育学部 3年
笠原 和希

後輩たちへ

そこで後輩たちに伝えたい思いにかられました。「知らない世界を知るために、とりあえず話を聞いてみることに」です。「知らない世界」を知ることによって、自分の気持ちに何か変化が起こるかもしれません。
2日間で8ブースを回り、様々な企業や、公務員の方から業界の話聞いて、とても有意義で中身の詰まった話であることを、身をもって感じる事ができました。
ぜひキャリアフェスタに参加して、自分の就活のきっかけにしてください。
目から鱗が落ちることは確実です。自分もそうであったように。

私は最初、キャリアフェスタに特に高い意識をもって参加していませんでした。自分が知っている企業もなかったもので、とりあえず面白そうだなと感じたブースをのぞいてみました。話を聞いていくうちに、「この会社はいいな」と思い始め、プレゼンしてくれている企業の人の声が耳に残りました。

平成31年度AO入試・推薦入試速報

体育学部では、スポーツ特別AO入試、AO入試、推薦入試A・Bが、教育学部ではAO入試、推薦入試E・Fを10月11月で実施した。

体育学部AO入試(アスリート型・自己推薦型・卒業生子女型)の志願者は、281人、前年度の322人から12%減となった。特にスポーツ教育学科では25%の減少と、昨年度から大幅に減少した。これは、昨年度入試で、スポーツ教育学科の自己推薦型での出願が可能となったことによる志願者増で、倍率が高くなったために敬遠されたと考えられる。

推薦入試A・Bでは、志願者は474人で、前年比17%減となり、こちらもAO入試同様、スポーツ教育学科が前年比33%減と落ち込んだ。反対に、健康・スポーツマネジメント学科はAO入試17%増、推薦入試16%増となり、アスリート・教員養成志向から、健康スポーツ・サポート系志向の受験生が増えたと思われる。

教育学部はAO入試(自己推薦型・卒業生子女型)の志願者は56人で、昨年度とほぼ同数の志願者となった。推薦入試E・Fでは、今年度よりコース併願が可能となり、志願者も昨年度の126人から237人(延べ)に増加した。特に小学校教育コ

ースは284%の大幅増となり、実志願者数でも増加している。高校生の多くが受験する受験産業による模擬試験の動向では、教員養成系の私立大学志望者が下げ止まった感があり、この数年続いた不人気傾向から脱却したと思われる中で、併願制が功を奏したのかもしれない。

一般入試は2月1日・2日で行われ、体育学部ではA・B合わせて、スポーツ教育学科で412人、健康・スポーツマネジメント学科で254人の志願者が集まり、両学科で300人が合格、また、教育学部では前期E・F合わせて、小学校教育コースで86人、保健体育教育コースで333人の志願者が集まり、両コースで157人が合格した。AO・推薦入試の体育学部の減少をどこまでカバーできるのか期待されたが、一般入試の志願者は前年比で体育学部83%、教育学部80%で、全体では82%に落ち込んだ。

教育学部の一般入試後期の発表を残し、2019年度の入試が終わろうとしている。2020年度から始まる新入試制度へ、さらなる認知向上に向け、マーケットの状況と照らし合わせてますますの広報活動をする必要があると考える。【入試・広報部】

盛況だったオープンキャンパス2018

今年度も高校生、保護者対象のオープンキャンパスが開催された。7月1日には、保護者のみを対象としたオープンキャンパスを開き、ベネッセグループ株式会社進研アドの町本博氏から、大学を取り巻く環境変化など、保護者の方に知っていただきたいことを、説明していただいた。その他、入試説明、キャンパスツアーと、普段、学生が食べている学食を体験してもらおうというプログラムを提供した。

また、同22日から、通常のオープンキャンパスを計4回開催。猛暑の中、初回は昨年度を上回る参加者でスタートした。参加者が大学の講義を体験できる体験授業は、体育学部6コース、教育学部2コースの計8プログラムを各開催日に実施。22日には、コーチ教育コースの宮地弘太郎教授による「基本技術とゲーム理解」で実技体験や、アスレティックトレーニングコースの有吉晃平准教授による「競技スポーツにおけるアスレティックトレーナーの役割」、小学校教育コースの陳洋明講師による「子供に体育の楽しさを伝えられる小学校教員になるうー」などの体験授業が行われ、4日間で32の講義に多くの参加があった。

また、学部・学科説明やキャリア説明が行われ、入試説明は、2020年度入試から新入試制度が始まるため、既卒生、現高3年生対象の2019年度入試と、現1、2年生対象の新入試の説明を、会場を分けて行った。各コースの学びを紹介する「コースの学び体験」や、学内を案内する「キャンパスツアー」、「学生による大学生活紹介」

では本学の学生が高校生と直接触れ合い、施設紹介やコースの学び、キャンパスライフを詳しく説明してくれた。体育大学らしいプログラムとして、「トレーニング体験」を昨年度から行い、実際に最新マシンを使用できることもあり、多くの参加者で盛り上がった。

高校生、同伴者を含めて延べ2682人の参加者が酷暑の中、参加していただいたオープンキャンパスは、一般入試のための「入試対策講座」を12月9日に開催、今年度のオープンキャンパスを終了した。

【入試・広報部】



来学者で賑わうオープンキャンパス



ライフセービングでの救助実習



最終日、隊列を組んでの遠泳

参加者全員資格ゲット 平成30年度臨海実習

今年度の臨海実習は、7月3日から7日まで、和歌山県白浜町の白良浜海水浴場で、3年生59人が参加して行われた。

実習初日は開講式の後、早速、班別に分かれて水慣れから初歩の泳ぎ、隊列練習を行った。台風の影響もあり悪いコンディションであったが、授業が始まると体大生らしく、積極的に取り組んでいた。

実習2日目から4日目は、6班を2グループに分け、ダイビングとライフセービングを1日半ずつ、

交互に行うプログラム。ダイビングは、安全を配慮して1回目の初期指導を田辺市のスイミングスクールで行い、残りの1日を海での実習とした。また、ライフセービングは、波の小さい浜で実習を行い、それぞれ、PADI、スクーバダイバーとウォーターセイフティの資格を実習生全員が手にすることができた。

最終日は、少し波も穏やかになった白良浜海水浴場を、9時に隊列を組んで出発し、湾内を1周するコースで約35分間の遠泳を全員が無事に完泳し、有終の美を飾った。

ご協力頂きました白浜町の関係機関、講師の先生方、実習にご協力頂いた教職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

【実習主任】 川島康弘

4年生自然と真剣勝負 野外活動実習初年度



声援を背にロッククライミングに挑む

4年生を対象としたキャンプ実習Bは、8月27日から31日まで、兵庫県美方郡にある尼崎市立美方高原自然の家で行われた。野外活動実習が選択必修科目になった初年度の学年で、41人が参加した。

実習は、5日間のテント泊、朝食と夕食は全て野外炊事。1日目はキャンプ場に到着した途端、バケツをひっくり返したような雨が約1時間も続き、自然の洗礼を浴びたスタートとなった。雨が落ち着き、テント設営などをして5日間の環境整備を行った。

2日目と3日目は、全体を2つのユニットに分け、ロッククライミングとシャワークライミングを交代で行った。ロッククライミング



実習初年度に参加した学生たち

グは約15mの高さの岩を登る。4つのルートがあり、どれも難易度が高く、途中で諦める者、1時間近く岩にしがみつく者など、仲間の声援を受けながらも自分との長い闘いになった。シャワークライミングは、グループみんなで力を合わせ、急流の沢を登って行く。途中には段差が高く、流れが強い場所もあり、体力が試される真剣勝負だった。今年から夏期開催となったため、4年生の学生生活を試すような冒険的なプログラムを導入した。

今回は本学から村上雷多先生にご協力いただいた。村上先生は、全日本剣道選手権大会の大阪府予選会(9月1日開催)が直前にも関わらず、快くご参加いただき、2日目の夜には全員で火を囲み、先生の武道のお話を伺うことができた。4日目の登山、キャンプファイヤー、5日目のまとめまで、大きな事故や怪我無く終われたことを関係者の皆様、そして美方高原の自然に感謝したいと思います。

【キャンプ実習B副主任】 伊原久美子

サンライズ・キャンプ12回目の絆

東日本復興支援ボランティア

本学社会貢献センター（センター長、富山浩三体育学部教授）は、9月17日から20日まで東日本大震災で大きな被害を受けた、福島県南相馬市で復興支援活動を行った。震災翌年の2012年、「サンライズ・キャンプ」と名付けられた本学の教職員、学生によるボランティア活動は、今回で述べ12回目を数える。

今回は、学生16人、教職員8人の総勢24人が参加、小高駅前の環境整備や、高齢者の体力測定、デイサービスセンターでの傾聴、レクリエーション活動、小高（おだか）区の4小学校での体育授業（マット運動）の実施、鹿島スポーツクラブでの指導、小



レクリエーション活動をする学生たち

高区大富地区にある熊野神社周辺の環境整備と、福島大学との交流活動、被災地見学など、盛りだくさんの活動に取り組んだ。

小高区の4小学校での体育授業では、器械体操を専門とする体育学部の田原宏晃講師が模範演技を交えて指導を行い、参加した児童たちは楽しみながらも、真剣に取り組む「教え方が丁寧でわかりやすかった」「マット運動は苦手だったけど、教えてもら

い、できるようになった」などと笑顔で話してくれた。南相馬市の人たちにとってもサンライズの来訪が楽しみのもので「明るく、元気で、気さくな大阪体育大学の方たちにパワーをもらっている」といきいきと語っていた。南相馬市の代表者らが、本学に答礼訪問したこともあり、絆がより深まっている。

富山教授は「3泊4日という時間のなかで、できることは限られているが、これまでに南相馬の方々と培ってきた関係や、参加した学生の学びと成長など、時間では測れない成果は無敵です」と話している。

また参加した学生たちは「現地に来て、災害の実態を肌で感じた」「先輩たちが残してくれたものを、後輩たちに繋げたい」「地元の人たちと交流して喜んでもらえたことは生涯忘れられない」などと感想を述べた。

2011年3月11日、宮城県三陸海岸沖を震源とするマグニチュード9.0の大地震が発生、太平洋沿岸では大津波、福島県では東京電力福島第一原子力発電所の世界最悪レベルの事故で、放射能が拡散、多くの住民が県内外に避難、帰宅困難地区のほとんどは解除され、帰省は緩和されたが、

放射能に汚染された残土は黒のビニール袋に入れられたままになっている。

残土の処分は、汚染残土入りの袋が置かれていた地域で処分されるという政府方針が明らかになり、完全復活には至っていない。離れ離れになって暮らしている家族も多く、約4万2000人（3月2日現在）が県内外に避難している。

親子スポーツセミナーに講師ケルン体育大学から

ライフスポーツ財団と共同

本学社会貢献センター（センター長、富山浩三教授）は、ライフスポーツ財団（大阪府吹田市、清水進理事長）と共同で、交流のある独・ケルン体育大学の教員らを招き、9月28日、中央棟大会議室で「親子スポーツセミナー」を開催した。本学の教員、学生、同財団の公認インストラクターら162人が参加、会場は熱気にあふれた。



風船遊びを披露するシュタインベルグさん

のスポーツインストラクター、カタリーナ・シュタインベルグさんは、乳児の人形、トレーニング用のボールなどを使いながら実例を出して分かりやすく話した。参加者は2人の熱のこもった講義を熱心に聴き入っていた。

講義の前に、同大学の教員たちは、同財団顧問で本学の細川盤名誉教授とグラウンドゴルフ交流、27日は、本学の施設を見学。競技ごとに設けられている施設に驚き、部活も見て回った。また体育館の入り口に靴がきちんと並べられていることに関心を示していた。

最終日の29日は、同財団が実施している京都府長岡京市ライフスポーツクラブに参加。参加者は「大学では充実した施設を見せてもらい、学生たちが一生懸命部活に取り組んでいる姿に感動した。部活だけではなく、しっかりと日常生活を送っているのだろうなと感じた」と話していた。

最優秀奨励発表賞受賞

日本スポーツ整復療法学会

神崎教授、村上講師、滝瀬名誉教授ら共同研究プロジェクト

第20回日本スポーツ整復療法学会大会が、10月20、21日両日、東京海洋大品川キャンパスで開かれ、本学の滝瀬定文名誉教授、体育学部の神崎浩教授、村上雷多講師、河上俊和氏（本学大学院博士後期課程修了、現太成学院大講師）が「メカニカルストレスが踵骨骨密度に与える効果の再検証」について共同研究成果を発表し、最優秀奨励発表賞を受賞した。

今学会では、東京五輪に向けた特別企画として、アテネ、北京、ロンドン、リオデジャネイロの五輪4大会連続、レスリングの金メダリスト、伊調馨選手の特別講演があった。同選手は、自身の歩みや、鍛錬に關するトレーニングは、科学的理論に裏付けされたものと話した。さらに、オリンピックの大舞台での研ぎ澄まされた技術、体力、精神力の発揮は、トップアスリートしか語ることができないオーラが伝わってきた。

一方、高齢者における日常生活活動度と、筋力低下の予防に関する課題として、福永哲夫東大名誉教授（鹿屋体大前学長）が「2020年を健康で迎えるための貯筋運動」をテーマに特別講演。今回、4氏の研究発表は、高齢期の骨格筋量減少は、身体機能の脆弱化や認知機能の低下、そして死亡率の上昇と関連し、骨格筋のサルコペニアと骨粗鬆症といった運動器の脆弱化を招

き、防衛体力や虚弱、生活の質の低下を引き起こす要因となる。この基礎研究として、これまで骨内部における破骨細胞と、骨芽細胞による骨代謝の制御システムと運動負荷（メカニカルストレス）との関係について研究を進めてきた。

そこで、フィールド研究として、剣道選手の打突時における踏み込み足へ加わる衝撃性負荷は、踵骨部の骨密度に変化を与える。踵骨に対する衝撃性負荷は、骨内部でメカニカルシグナルとなり、筋、骨格系や神経・毛細血管網の発達、さらに若年期の骨密度向上に果たす運動の意義について再検証を加えた成果が、学術的なエビデンス構築に繋がるものとして高く評価された。

科学の追求は、スポーツと同じで、一人では決して成し得ない。神崎教授をはじめ、村上講師、剣道部の皆様の協力を得なければ出来ない。大学は、研究と教育に邁進できる素晴らしい環境かつ、財産を備えている。課外活動やゼミ活動を通しての学びは、人生を追求する上で重要な役割を担うもの

とつくづく感じる。近頃、スポーツや研究の探求心も失いかけていたが、今回の研究発表者の河上氏の研究課題と対峙する姿勢や、神崎教授とコラボレートした研究活動は、古希を迎えた私の心を熱くさせ、「感動」が湧出してきた。

大阪体育大学の学び舎は、スポーツの追

求に加えて教育活動に貢献する様々な原理・原則やエッセンスに満ち溢れている。研究・教育において最も大切な「感動」を甦らせた。まだ追いつけぬ続けるスポーツ科学に素晴らしい花を咲かせ、素晴らしい実の結実を創造していかねばならない。老いるにはまだまだ……。東京オリンピックを迎えようとする空を見上げながら、そう感じさせられた。

【滝瀬定文名誉教授】

最優秀奨励発表賞

筆頭者 河上俊和 殿

共同研究者 神崎浩、村上雷多、滝瀬定文

演題 「メカニカルストレスが踵骨骨密度に与える効果の再検証」

貴殿の発表は、第20回日本スポーツ整復療法学会大会における一般発表演題の中から選考した結果、その内容が高く評価されましたのでここに表彰します。

2018年10月21日

第20回日本スポーツ整復療法学会大会

大会長 佐竹 弘靖



受賞した滝瀬名誉教授（左）と河上氏

図：第20回日本スポーツ整復療法学会大会「最優秀奨励発表賞」

平成30年度教育後援会役員会



熱心で和やかな役員会

平成30年度教育後援会役員・委員推薦名簿

H30.7.21

氏名	30年度役職	29年度役職	学 生
棚村 千鶴	会長	副会長	4年 男子
高山 リサ			4年 女子
中西 あけみ			4年 男子
村上 さとみ			4年 男子
米良 則子			4年 女子
赤松 さゆり			4年 女子
間宮 尚江			4年 女子
菊川 佳子			4年 女子
清水 淳子			3年 女子
田中 千枝子			3年 男子
小林 佐千子			3年 女子
辻本 智子	副会長	副会長	3年 女子
阪上 文子			3年 男子
山本 弘美			3年 男子
渡邊 樹世子	副会長	会計監査	3年 男子
住友 良恵			3年 男子
川村 浩衣			2年 男子
金戸 弘行			2年 女子
三宅 欣市			2年 男子
中井 剛弘	会計監査	会計監査	2年 男子
山崎 理恵			2年 男子
吉本 早織			2年 女子
藤田 恭子			2年 男子
齊藤 文代			2年 男子
橋 浩美			1年 男子
服部 多美枝			1年 男子
黒田 真貴子			1年 女子
澁谷 加代			1年 女子
佐川 弘美	会計監査		1年 女子
谷向 富美子			1年 女子
倉澤 麻紀			1年 女子
横山 文恵			1年 女子

平成30年度の大阪体育大学教育後援会役員会が7月21日、本学中央棟大会議室で開かれ、平成29年度の事業、決算報告、平成30年度の予算などが承認された。新役員も選出も行われ、岡本栄子会長から棚村千鶴新会長にバトンタッチした。

教育後援会は、学生の教育厚生に関する事業▽運動部その他クラブ活動の援助▽学生の傷害に対する援助▽学生の進路指導に対する援助、などの事業を行っている。

役員会には野田賢治理事長、岩上安孝学長も出席し、日ごろの温かい支援に感謝するとともに、学生や指導者たちの活躍ぶりを報告した。

◇新役員は次の通り◇
会長 棚村千鶴▽副会長 辻本智子、渡邊樹世子▽会計監査 中井剛弘、佐川弘美

「摂泉会」第36回代議員会

大阪体育大学同窓会「摂泉会」(長家秀博会長)の第36回代議員会が昨年7月7日、大阪市北区の同窓会館アネックスで開かれ、平成29年度の事業報告と決算報告、平成30年度の事業計画、予算計画の審議があり、原案通りに承認された。

代議員会の後、帝国ホテル大阪で行われた懇親会では、野田賢治理事長、岩上安孝学長らが来賓として出席。同窓生たちと親睦を深めた。

本年度の摂泉会栄誉賞は、マテリアルススポーツ社長、藤本誠さん(13期生)が受賞。モーグル用スキー板「アイディーワン」を開発した功績が称えられた。摂泉会優秀賞は、菊池流帆(体育学部4年)さんが受賞。第29回ユニバーシアード競技大会で優勝し

た男子サッカーチームにレギュラーとして出場し、チームに貢献した活躍が評価された。

トップレベルで競技し、好成績を残した選手たちへの激励金授与では、ハンドボール部の現役学生5人と卒業生3人の計8人が選ばれた。この激励金は、日本代表選手や、海外の大会遠征などに参加し、顕著な功績のあった学生や卒業生に対し、同窓会から毎年、贈られている。

◇激励金を授与された選手は次の通り◇
榎和奏、相澤菜月、笠井千香子、中山佳穂、吉留有紀(以上、現役学生・ハンドボール部)、伊藤真衣子、吉田菜津美、酒井凌(以上、卒業生・アルティメット)



激励金を受けた酒井さん(左)と吉田さん、中央は長家会長



記念撮影の同窓会員たち

金子名誉教授全国短歌大会で特選

2首特選は異例、入選も

本学の金子公有名誉教授が、10月28日、生誕150年を機に新装された松山市の子規記念博物館で開かれた子規顕彰全国短歌大会で2首が特選になり、うち1首が愛媛県知事賞を受賞した。36回を数える同大会で、一度に2首が特選になることは極めて異例なこと、併せて入選もする快挙。

受賞した同教授は、受賞者全員を代表して感激の面持ちで、特選2首の背景などを述べた。「格調の高い会場で、テレビや新聞でしか知らない審査員を前に足が地に着いていなかった」と笑う。

同教授は短歌の先輩、故林信恵（みちえ）教授に、10数種を見てもらい「立派な短歌」と評され、NHK講座で勉強、投稿を続けてきた。歌歴は4年半で「特選と聞いた時にはまさか自分が？」と飛び上がったそう



表彰状を受ける金子名誉教授（右）

だ。

常にペンとメモ用紙を持ち歩き、短歌になりそうなものが浮かんだらその場でメモ、それを基に朝方に仕上げる自己流を貫いている。

特選受賞歌と講評は次の通り。

〈A1がいずれは人類滅ぼすと予言して逝くホーキング博士〉

こみ上げる達成感

雨山祭の舞台裏

人類の未来を予見した博士の言葉を巧みに詠んだ。子規生誕150年の歴史に、人類絶滅までの未来が同一線上で繋がった。〈戦友が父の最期を知らせたる手紙が母の遺品に残る〉

反戦歌を身近な経験を用いて表現した。

戦友の手紙の文字の滲みなどの情感をすっかり削ぎ落としたという。

雨山祭は大阪体育大学の一大イベントだ。毎年1年生から雨山祭実行委員を募集し、6月から10月最終土、日曜日の雨山祭当日まで活動する。実行委員である1年生と2年生の4役を中心に、2年生から4年生の有志にも協力してもらい、より良い雨山祭を作るために頑張るのだ。実行委員としての最初の活動は、協賛金集め。協賛金とは、周辺地域の店舗に、費用として協賛金を募り、いただいた金額に応じてパンフレットに広告を掲載させてもらう。

協賛してもらおう店舗は多く、地域の方々から応援されているのだと感じる事が出来る。協賛金集めが終われば、雨山祭に向けての準備に取り掛かる。各企画担当に分かれて、雨山祭で「どんな事をしたか」「どんな景品がいいか」「どんな風に盛り上げたいか」などを自分たちで考えて企画を

練る。

それぞれの企画を成功させるために、アイデアを出し合い何度も話し合う。時に意見がぶつかることもあるが、それを乗り越えて、一緒に企画を作る仲間との思い出は、かけがえないものになる。

雨山祭当日は、ステージ企画だけでなく、子どもたちとの交流プログラムや、フリーマーケット、模擬店など様々な催しを実施する。球技大会のレベルの高さは、体育大学ならではのものです。とても白熱した戦いを見ることが出来る。学生や地域の方々が、楽しんでくれているのを見ると「やってきて良かった」と達成感が込み上げる。頑張って作り上げた雨山祭が、参加していたいた方々の思い出になってくれれば良いなとつくづく思う。

【雨山祭実行委員長、中谷一輝】



会場設置に懸命な実行委員たち



ステージでパフォーマンスを見せる学生

暴力排除の講演会

大阪体育学会

「スポーツ界から暴力を排除することは可能か」をテーマに、大阪体育学会主催の講演会が12月9日、筑波大学大学院の菊幸一教授（体育社会学、スポーツ社会学）を講師に招き、大阪市北区の大阪体育大学同窓会館（アネックス）で行われた。

同教授は「戦争に代表されるように地球上で暴力がなかった時代はない。人間と暴力は切っても切れない仲にある」としたうえで、「人間の持つ暴力性をいかに飼い慣らしてコントロールするかが問われている」と述べた。もと

もと近代スポーツは、欧州でレジ

ヤーとして生まれたが、同教授は「日本の近代スポーツは、学校のクラブ活動を軸に国民に普及したため、スポーツのレジャー的な意味合いよりも、教育の役割が強調され過ぎている」と指摘。指導者は教育の成果を出そうとして、体罰や暴言など暴力的な行為に及んでしまうという。「指導者など、スポーツの供給側の論理から、スポーツの需要側、楽しむ側の論理を大切にす

る構造転換が必要だ」とした。講演後の講師と参加者との討論会では、「結果の勝ち負けにこだわらなければ体罰は無くなるのか」「暴力の連鎖を止めるにはどうすればいいのか」など活発な意見交換が行われた。

る構造転換が必要だ」とした。



講演する菊教授

コラム

ボーシヤ

名誉教授 和田隆夫

15分間のジャズ

ジャズを意識しだしたのは高校生の頃だった。

1970年前後の高校生は寝不足だった。原因はラジオである。当時は深夜のラジオ放送全盛期で、大阪では一世を風靡したABCヤングリクエストと、MBSヤングタウンが双壁だった。徹夜覚悟なら、オールナイトニッポンである。ぼくは、木曜深夜よく野沢那智／白石冬美のバックインミュージックを秘め事のように聞いていた。

ただ高校生は深夜番組を聴く前に、ラジオ関西で放送された旺文社の『大学受験ラジオ講座』を聴くのが常だった。

放送時間になるとテキストを机の上に置き、イヤホンをつける。オープニングにブラームスの「大学祝典序曲」が流れる。ぼくの場合、ここが問題で、ブラームスではなく、ジャズが流れてくるのだ。

ああ、チューナーは、ラジオ関西ではなく朝日放送ラジオに合せている。

15分間の『ナベサダとジャズ』である。聴くきっかけは、おぼろげでよく覚えていない。偶然だと思う。

司会はのちに「宇宙戦艦ヤマト」のデスラー総統をした伊武雅刀で、演奏はまるごと渡辺貞夫である。曲は何でもありだった。すべてがジャズになるみたいなの。

「これがジャズかあ」

ぼくの大学受験講座は常に15分短かった。

この番組は1969年から1972年と短く、ぼくは幸運にも出会え、そしてジャズを今も聴いている。

72年の番組終了後「渡辺貞夫マイ・ディア・ライブ」が始まった。もちろんできる限り聴き、その流れでジャズシンガーの安田南を知り、彼女が片岡義男とパーソナリティをした「FM25時 気まぐれ飛行船～野生時代～」を聴くようになった。声もテンションも低めのトークがクールで、大好きだった。選曲もオシャレで、B.B.キングなど初めて知ったアーティストは多い。いつも最後は安田南の「ねむれ、悪い子たち」の言葉で終わるが、そっけないのに甘美なささやきで眠れなかったものだ。ぼくが大人になる入口にこの番組があった。79年に安田南は突然番組を降板して、それからぼくは聴かなくなった。熱心に聴いていた頃、聴けない夜はカセットテープに録音して聴いた。それがまだぼくの手元に彼女のアルバムSome Feelingとともにある。



窓

◆◆名刺を交換すると「体育大学にお勤めですか。健康的で羨ましい」とよく言われます。健康なのは学生たちで、至って僕は不健康です。診察券を6枚も持ち「ポイントがついてくれないかな」なんて嘆いています◆◆まだ原因が特定できていない「痙性斜頸」というややこしいものに取り付かれて難儀しています。3カ月に一度、保険が利いて約5万円という高額な注射を打つてもいるのに、あまり効果が現れていません。とにかく首が勝手に動いたり、ガチガチに凝り固まったりするので◆◆だからといって、ジャーナルの発行が遅れても良いとの理由にはなりません。重々承知のうえで発行が大幅に遅れたことを深くお詫びいたします。早々と原稿をいただいた先生方にもご迷惑をおかけしました。新聞記者時代「もたもたしていたら、ニュースがソースになるぞ」とデスクに怒鳴られたことが脳裏に浮かびます。

【相馬卓司】

我が青春の記

教育学部講師

吉美 学



今も人生の春

「青春」とは、「年の若い時代」ということなので、18歳前後の自分を思い出して綴ることにする。高校生の頃の私は、パイロットという夢を持っていた。中学生の頃から飛行機に興味を持ち、空を飛びたいとあこがれていた。そのため、高校2年時には、進学先を航空大学校と定めていた。しかし、高校3年時に自身の視力という大きな壁にぶつかった。それまで、両眼とも1・2以上あった視力が、3年生の夏前に急降下し、受験資格を失ってしまったのだ。そこで、私は飛行機的设计士になりたくなり、突然工学部へと舵を切ったのだが、怠っていた学習が第二の壁となり、夢は叶わなかった。

結局、両親が小学校の教員をしていたこともあり、身近だった小学校教員を目指して同級生よりも長く勉強して大学に入学した。こ

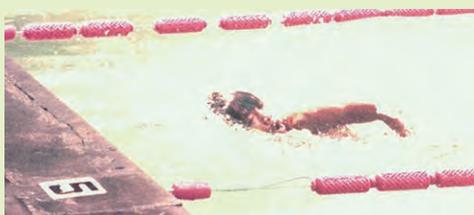
ら、競技指導に力を注ぐようになった。幸い、選手をはじめ周囲からも温かいサポートを頂き、やりがいを感じながら、指導者としての道を歩み始めることができた。その後、海外に進んでも競技指導に情熱を注ぎ、それなりの成果を実感できることも多かった。しかし、帰国して意気揚々と大学に着任した後には待ち受けていたのは、指導者として最も大きな挫折の経験だった。それからしばらく我慢の日々が続いたが、多くの方の支援と勝運に恵まれ、昨年の全日本インカレでは「勝つ」経験をさせて頂いた。地元の大変な応援の中で、4年生主将が最後に得意種目で、最高の演技を決めての劇的な試合となり、何よりも一緒に喜んでくれる人が大勢いたことが本当にうれしかった。これまで体操競技に関わった30年間で最も感動した瞬間であった。自分はまだまだ青春真っただ中にいるのかもしれない。

と進路決定に関しては、ダッチロール状態だった。大学時代は、是非入りたかったスキー部に入学し、基礎スキーに没頭した。ただ、夏の時期は比較的暇なことから、水泳部の同級生から「少し一緒に泳ごう」と誘われたため、部活動の二股をかけることとなった。周りからは「シーズン男」と呼ばれていたが、水泳は実質2年生までと短く、自身の得意種目の百斤自由形のように距離の半分の50斤で失速した。スキー部は3年生で部長を務め、部主催のスキー教室や、合宿と冬から春の休業中は信州を滑り回っていた。

合宿では、ゲレンデに向かってくる雪崩に遭遇したり、下級生の事故など様々な経験をしながら、部員全員で目標に向かって自身の力を磨き、大空ならぬゲレンデに綺麗な弧を描いた。このような「青春」時代だったが、「青



白馬山麓(岩岳スキー場)にて



大学のプールにて、苦しみながらの練習風景

春」には「人生の春に例えられる時期」という意味もあるらしい。大学教員である私にとっては、今も人生の春であり、「青春」なんだと気づいた。

体育学部准教授

藤原 敏行



青春真っ只中

自分の青春というものを振り返ろうとして、いつの何を青春と呼ぶべきか分からないことに気がついた。とにかく時間、労力、情熱を最も注いだのが体操競技であることは間違いない。

小学2年で体操競技に出会い、ずっとオリンピックを夢見ていた。しかし、最終的にはその夢は遠いものとして競技生活を終える結果となった。最後の2年間となる大学3、4年の時には全日本インカレに向けて、最も真摯に体操競技に向き合い、心身を鍛えることができたと思う。それでも競技成績としては目標に届かなかった。結果はどうあれ、競技生活のどの期間においても、当時は当時で真剣に取り組んでいた自負はあるので、それも青春と言える気もするが、やや物足りない気がしないでもない。

引退後は、大学院生として学びを深めなが

ら、競技指導に力を注ぐようになった。幸い、選手をはじめ周囲からも温かいサポートを頂き、やりがいを感じながら、指導者としての道を歩み始めることができた。その後、海外に進んでも競技指導に情熱を注ぎ、それなりの成果を実感できることも多かった。しかし、帰国して意気揚々と大学に着任した後には待ち受けていたのは、指導者として最も大きな挫折の経験だった。それからしばらく我慢の日々が続いたが、多くの方の支援と勝運に恵まれ、昨年の全日本インカレでは「勝つ」経験をさせて頂いた。地元の大変な応援の中で、4年生主将が最後に得意種目で、最高の演技を決めての劇的な試合となり、何よりも一緒に喜んでくれる人が大勢いたことが本当にうれしかった。これまで体操競技に関わった30年間で最も感動した瞬間であった。自分はまだまだ青春真っただ中にいるのかもしれない。



優勝杯を手にする筆者



クラブコーチをしていた筆者



最前列、左から3人目が筆者



極める力。

人を学び、育て、支える。

大阪体育大学

【大学院】

●博士 前期課程 後期課程

【体育学部】

●スポーツ教育学科
●健康・スポーツマネジメント学科

【教育学部】

●教育学科

大学事務局

庶務部、教学部、入試・広報部
キャリア支援部、大学院事務室

大学附置施設

図書館、スポーツ局、社会貢献センター
情報処理センター
スポーツ科学センター

支援組織

教養教育センター、キャリア支援センター
教職支援センター、学習支援室
学生相談室・カウンセリングルーム

<https://www.ouhs.jp>